『十帖源氏』巻二「わかむらさき」（95～110p.）

2011 年 *1* 月 *13* 日（木）　担当　菅原 郁子

〔４６・オ〕

【翻刻本文】

若紫　〔割・以歌名也〕

源十七才の春、わらはやみにわづらひ給て、北山に
おこなひ人のあるに、御供四五人ばかりして、あかつき
おはしたり。三月つごもりなれば、山の桜はまだ盛也。
さるべき〔傍・き＝符也〕物つくりて、すかせ奉り、かぢなど参る程に、
日たかくさしあがりぬ。すこし立出見給へば、爰かしこ、
僧房どもつゞらおりのしもに、小柴うるはしう、
屋、らうをつゞけて、あか奉り、花おりなどするは、「なに
がし僧都の二とせこもれる所」といへり。「こゝにおかし
げなる女こども、わかき人、わらはべなん見ゆる」といふ。日
たくるまゝに、源はうしろの山に出て、京のかたを見

【現代語訳】

若紫〔和歌の言葉から巻の名前を付けました〕

「光源氏」は十七才の春、瘧病という病気を治療するため、北山に住む
高徳の修行者（聖）のもとへ、お供を四・五人ほど連れて、夜明け前に
出発しました。三月の末日なので、山の桜はまだ満開です。

「聖」が適切な護符を作って、「光源氏」に飲ませ、加持祈祷などをしてあげていると、
日が昇り出しました。「光源氏」は少し外に出てあたりを見渡します。あちらこちらの、
山から続く曲がりくねった道に寺の宿舎がたくさん見えます。その道の終わりには、低い小枝の垣根がきちんと
している家があり、渡り廊下が続いていて、仏に水を供えたり、花を折ったりなどしている様子が見えるのです。
お供の者は「誰それとかいう僧都が二年間籠もっている所だそうです」と言います。さらに、「ここには美しい
女の子たち、若い侍女、女の子たちが見えます」と言います。日が
高くなるにつれて、「光源氏」は後ろの山に出て、都の方角を見渡し

〔４６・ウ〕

【翻刻本文】

給ふに、かすみたる四方のこずゑ、「絵に似たる」などの
たまへば、御供の人々、「いこくの海山のさま」「ふじの山、
なにがしのだけ」などかたり申す。はりまのあかしの
さきのかみ、しぼちのむすめかしづくなど、義清申出
す。夕暮〔夕＝合点〕のかすみたるに、惟光ばかり御供にて、彼小
柴垣のもとに立出のぞき給へば、西おもてに、持仏す
へておこなふあま君、四十あまりにて、たゞ人と
みえず。きよげなるおとな二人、わらはべ出入あそぶ。

中に、十ばかりにやあらん、しろきゝぬ、山ふきゝて、
はしりきたる女ご、あまたみえつる子どもににるべ
うもあらず、うつくしげ也。「すゞめの子をいぬきが

【現代語訳】
てみますと、霞がかった木々の梢があたり一面に広がっているのです。「光源氏」は「まるで絵を見ているようだ」などと言いますと、お供の者たちは「(絵をお描きになるのでしたら、)他国の海や山の景色がよいのでは」「富士山や、何とかという岳などもいいですね」などと語ります。(風情のあることで有名な)播磨の国の明石の浦の前長官(明石の入道)で、近ごろ出家した者が娘を大切に育てているなどという話も、好色な「良清」が話し出します。夕暮れで霞が深いのを良いことに、《光源氏》は「惟光」だけをお供にして、あの小さな
柴の垣根の辺りへ行き、立ってのぞいてみますと、西向きに、仏像を
置いて祈る《尼君》が見えます。年は四十歳ぐらいで、普通の身分の人には
見えないくらい魅力的です。それに美しい年配の侍女が二人、子供が出たり入ったりして遊んでいます。
その中に、十歳くらいでしょうか、白と黄色の着物を重ね着して、
走ってきた女の子(紫の上)は、たくさんいる他の子供とは似た
ところもなく、可愛らしい様子です。《紫の上》は「《雀の子》を《犬君》が

〔４７・オ〕
【翻刻本文】
にがしつる、ふせごにこめつる物を」とて、かほあかくす
りなしてたてり。此子のねびゆかんさまゆかしき
人かなと、めをとめ給ふに、藤つぼによく似たりと
おぼす。此姫君の事をあま君、
**　　おひたゝん　ありかもしらぬ　わか草を**
**　　をくらす露ぞ　きえんそらなき**
少納言のめのと、
**　　はつ草の　おひゆくすゑも　しらぬまに**
**　　いかでか露の　きえんとすらん**
と聞ゆる程に、僧都きたりて、「源氏の中将此
上のひじりのかたにおはします」と尼君にいへり。

【現代語訳】
逃がしちゃったの。籠をかぶせておいたのに」と言って、顔を赤くこ
すって立っています。この子(紫の上)が成熟していく様子を見届けたい
ものだなあと、「光源氏」はじっと見つめています、実は以前から思慕している「藤壺」によく似ていると
思ったからなのです。この姫君(紫の上)の将来を思って「尼君」は、(次のように詠みました)、
　　おひたゝん　ありかもしらぬ　わか草を
　　をくらす露ぞ　きえんそらなき
(これに対して、紫の上付きの)「少納言」は、
　　はつ草の　おひゆくすゑも　しらぬまに
　　いかでか露の　きえんとすらん
と詠みあっていると、「僧都」がやって来て、「「光源氏」様が山の

上の「聖」の所に来ているようですよ」と「尼君」に伝えるのでした。

〔４７・ウ〕
〈絵１〉春、北山の僧房で、犬君が雀の子を逃がしたために、紫の上が泣いている。光源氏がその様子をうかがっている場面

〔４８・オ〕
【翻刻本文】
此僧都より源へ御弟子をつかはさる。源そうづへお
はしまし。御物語聞え給ふ。木草も心ことに植なし、
やり水にかゞり火、とうろなど参たり。ひるの面影
心にかゝりて、「尋〔傍・尋＝源詞〕まほしき夢を見給しかな」と聞
え給へば、僧都打わらひて、「うちつけなる御夢語
かな。故按察大納言世になくなる。其北方はなに
がしがいもうとにて、世をそむきしが、大納言のむす
め一人をもてあつかひしを、兵部卿宮かたらひ給ひ
しがなく成て、物おもひにやまひづく」など申給ふ。
さては〔傍・さ＝源心〕、姫君は兵部卿の御むすめなるべしとおぼし、
くはしくとひ聞給ふ。「まだ〔傍・ま＝詞〕にげなきほどなれど、

【現代語訳】
この「僧都」は「光源氏」の所へ弟子を行かせます。そして、「光源氏」は「僧都」の所へと
やってきました。「僧都」は「光源氏」に山籠もりのいきさつを話し始めます。宿舎の庭には草木が丹精込めて植
えられ、庭の水には篝火が灯され、灯籠にも火が入れられています。昼間見た「紫の上」の面影が
どうしても気にかかり、「光源氏」は「聞きたかった夢を見たのですが」と言い
ます。「僧都」は笑いながら、「突然夢語り
ですか。（ずいぶん前に）「按察大納言」が亡くなりました。その妻（尼君）が私の
姉で、出家して尼になったのですが、「按察大納言」との間に生まれた娘
一人の世話をしていました。そこに兵部卿宮がこっそり通うように
なり、ついに娘は（身分違いによる）物思いから病気で亡くなってしまったのです」などと言います。
「光源氏」は、それでは、姫君（紫の上）は兵部卿宮の娘であるのかと思い当たり、
さらに詳しく聞きます。「光源氏」は、「まだ世話役にふさわしい歳でもないが、

〔４８・ウ〕
【翻刻本文】
おさなき御うしろみすべく聞え給てんや。思ふ心
ありて」との給ふ。「いと〔傍・い＝僧都〕うれしかるべきおほせ事なり。
うば君にかたらひ聞えさせん」といへり。初夜過る
ほどに、源あま君のもとにおはして、少納言の
めのとにあひ給ひて、
　　はつ草の　わか葉のうへを　見つるより

旅ねの袖も　露ぞかはかぬ
いりてあま君にきこゆ。あま君、
まくらゆふ　こよひばかりの　露けさを
み山のこけに　くらべざらなん
ゆくすゑの事まで契り給ふ。暁がたにせんぼうの

【現代語訳】
幼い人（紫の上）の後見人に私を考えてくれませんか。考えが
ありまして」と言います。「僧都」は「とてもうれしいお話です。
祖母（尼君）と相談しましょう」と返事をします。これを受けて、日没後のお祈りが済んだ
ころに、「光源氏」は「尼君」のもとにやって来て、「少納言」
に取り次ぎを頼み、（次のように歌を詠みます。）
はつ草の　わか葉のうへを　見つるより
旅ねの袖も　露ぞかはかぬ
「少納言」は奥に入って「尼君」に取り次ぎます。「尼君」は、
まくらゆふ　こよひばかりの　露けさを
み山のこけに　くらべざらなん
（と、歌を返します。）
「光源氏」は（「尼君」に）「紫の上」の将来のことまでも約束するのです。明け方には法

〔４９・オ〕
【翻刻本文】
こゑ、山下風につきて、滝の音にひゞきあひたり。
〈源〉吹まよふ　みやまおろしに　ゆめさめて
なみだもよほす　たきのをとかな
〈僧都〉さしぐみに　袖ぬらしける　山水に
すめるこゝろは　さはぎやはする
あけゆくまゝに、山の鳥どもそこはかとなくさへ
づり。鹿のたたずみありくもめづらしく見給ふ。
御むかへの人々まいりて、おこたり給へるよろこび
きこえ、内よりも御使あり。源、
宮人に　ゆきてかたらん　山ざくら
風よりさきに　きてもみるべく

【現代語訳】
華経を読む声が、山から吹いてくる風に乗って、滝の音に響き合っています。
〈光源氏〉
吹きまよふ　みやまおろしに　ゆめさめて
なみだもよほす　たきのをとかな
（この「光源氏」の歌に対して、「僧都」は次のように歌を返しました）
〈僧都〉
さしぐみに　袖ぬらしける　山水に

　　すめるこゝろは　さはぎやはする
明けていくにつれて、山の鳥たちがどこかで鳴いています。
「光源氏」は鹿が趣深く歩く様子も珍しいことだと思って見ています。(気分がだんだんと癒されていくのでした。)
都から迎えの人々がやって来て、「光源氏」の快復を喜びます。
「桐壺帝」からも見舞いの使者がやってきました。「光源氏」は（「僧都」や「聖」に別れの歌を詠みます)、
　　宮人に　ゆきてかたらん　山ざくら
　　風よりさきに　きてもみるべく

〔４９・ウ〕

【翻刻本文】

〈僧都〉うどんげの　花まちえたる　心ちして
**　　みやまざくらに　めこそうつらね**
〈聖〉おく山の　松のとぼそを　まれにあけて
**　　まだ見ぬ花の　かほをみるかな**
御まもりに独鈷たてまつる。僧都のもとなる童
して、あま君にせうそこあり。源、
**　　夕まぐれ　ほのかに花の　いろを見て**
**　　けさはかすみの　たちぞわづらふ**
〈尼君〉まことにや　花のあたりは　たちうきと
**　　かすむるそらの　けしきをも見ん**
御むかへの人々、君達もあまた参り給へり。岩が

【現代語訳】

（この「光源氏」の歌に対して、「僧都」「聖」は、次のように歌を返します）
〈僧都〉
　　うどんげの　花まちえたる　心ちして
　　みやまざくらに　めこそうつらね
〈聖〉
　　おく山の　松のとぼそを　まれにあけて
　　まだ見ぬ花の　かほをみるかな
「聖」は餞別として、「光源氏」に護身用の独鈷（密教の仏具）を贈ります。「僧都」に仕える子供に
頼んで、「光源氏」は「尼君」に手紙を送ります。「光源氏」は、(次のように歌を詠みます。)
　　夕まぐれ　ほのかに花の　いろを見て
　　けさはかすみの　たちぞわづらふ
（これに対して、「尼君」は次のように歌を返します）
　　まことにや　花のあたりは　立ちうきと
　　かすむるそらの　けしきをも見ん
迎えの人々や、左大臣の家の息子たちもたくさんやって来ました。岩

〔５０・オ〕

【翻刻本文】

くれのこけのうへになみゐて、かはらけま
いる。頭中将、笛をとり出てふきすましたり。
弁の君、「とよらの寺のにしなるや」とうたふ。僧都、
きんをもて参りて、「これ、たゞ御てひとつあそ
ばして、山の鳥もおどろかし給へ」と聞え給へば、
源、かきならして、みなたち給ひぬ。

【現代語訳】
かげの苔の上に並んで座り、杯を取って
宴会が始まります。まず、《頭中将》が、《笛》を取り出して澄んだ音色を響かせます。
それに合わせて、「弁の君」が「豊浦の寺の西なるや」と謡います。《僧都》は、
《琴》を持ってきて、「これを、ただ一曲弾い
て、山の鳥を驚かせましょう」と勧めるので、
《光源氏》は、その琴を弾き鳴らして合奏し、一同は出立しました。

〔５０・ウ〕
〈絵２〉北山にて、光源氏が僧都や君達と別れの酒宴・合奏する場面

〔５１・オ〕
【翻刻本文】
まづ内へ参給て、日ごろの御物語、聖のたうと
かりける事など聞え給ひ、左大臣殿とつれてま
かで給ふ。又の日北山へ御文奉れ給へり。
　おもかげは　身をもはなれず　山ざくら
　こゝろのかぎり　とめてこしかど
〈尼君〉あらしふく　おのへのさくら　ちらぬまを
　こゝろとめける　ほどのはかなさ
二三日ありて、惟光を奉れ給ふ。
　あさか山　あさくも人を　おもはぬに
　など山の井の　かけはなるらん
　くみそめて　くやしときゝし　山の井の

【現代語訳】
京に戻ってから、「光源氏」はまず宮殿に向い、「桐壷帝」に数日の北山でのことを語ります。「聖」の霊験
が優れていたことなどを話すと、来ていた義父の「左大臣」と一緒に退出
しました。翌日、「光源氏」は北山へ手紙を出します。
　おもかげは　身をもはなれず　山ざくら
　こゝろのかぎり　とめてこしかど
〈尼君〉
　あらしふく　おのへのさくら　ちらぬまを
　こゝろとめける　ほどのはかなさ

二、三日して、「惟光」を使者とし、また手紙を持って行かせます。
　　あさか山　あさくも人を　おもはぬに
　　など山の井の　かけはなるらん
（この「光源氏」の歌に対して、「尼君」は歌を返すのでした）
　　くみそめて　くやしときゝし　山の井の

〔５１・ウ〕
【翻刻本文】
　　あさきながらや　かげをみるべき
「あま君わづらひ給ふ事よろしくは、此比過して、
京の殿にわたり給てなん、聞えさすべき」とあるを、
心もとなうおぼす。三〔三＝合点〕、四月の比より、藤壷、なやみ
給ふ事ありて、三条の宮にまかで給ふ。〔割・懐妊也〕
源の密通の中立は王命婦也。源、
　　見ても又　あふ夜まれなる　夢のうちに
　　やがてまぎるゝ　わが身ともがな
　　世がたりに　人やつたへん　たぐひなく
　　うき身をさめぬ　夢になしても
源の御なをしなど、ぬぎをき給へるを、王命婦かき

【現代語訳】
　　あさきながらや　かげをみるべき
「少納言」からも、「尼君のご病気が良くなるまでは、ここ（北山）で過ごして、
亡くなった按察大納言邸の京の家に戻りましたら、改めて挨拶しましょう」との返事なので、
「光源氏」はもどかしく思います。さて、三、四月の頃から、「光源氏」が恋しく思っている「藤壷」は、体調不良で、三条にある実家に帰りました。〔割・「藤壷」は（「光源氏」の子を）懐妊するのです〕
「光源氏」と「藤壷」の密通の仲立ちをしたのは「王命婦（藤壷の女官）」です。「光源氏」は、
　　見ても又　あふ夜まれなる　夢のうちに
　　やがてまぎるゝ　わが身ともがな
（と、詠みました。これに対して「藤壷」は、次のように歌を返します）
　　世がたりに　人やつたへん　たぐひなく
　　うき身をさめぬ　夢になしても
「光源氏」が脱いで置いていった上着などは、「王命婦」がとり

〔５２・オ〕
【翻刻本文】
あつめてもてきたり。藤つぼ、七月に内へ参給ふ。
すこしふくらかに成給て、おもやせ給へる、にるもの
なくめでたし。尼君〔尼＝合点〕の京のすみか尋て、時々御
せうそこあり。「いたうよはり給ふ」と聞給て、とぶら
ひおはします。紫の上も、「源氏の君こそおはしたな

れ」とのたまふを、人々かたはらいたしと思ふ。帰給て、

〈源〉いはけなき　たづの一こゑ　きゝしより

あしまになづむ　舟ぞえならぬ

〈又〉手につみて　いつしかもみん　むらさきの

ねにかよひける　野べのわか草

僧都の御もとへも、久しくをとづれ給はねば、人をつ

【現代語訳】

集めて持ってきていました。「藤壺」は、七月にやっと宮殿へと戻ります。

少しふっくらして、妊娠のために頬がやつれている様子は、比べるものがないほどに

美しいのです。さて、「光源氏」は「尼君」の京の住まいを尋ね、時々手紙を出します。「惟光」から「「尼君」はとても衰弱しているようです」と報告を受け、「光源氏」は「尼君」のもとへと見舞いに行きます。そこへ「紫の上」がやって来て、「「光源氏」様が来たのですって。」と無邪気に言うので、そばにいる人々は間が悪いことだと思うのでした。帰るときに、

(「光源氏」はあどけない「紫の上」を思い、歌を詠みます)

〈光源氏〉

いはけなき　たづの一こゑ　きゝしより

あしまになづむ　舟ぞえならぬ

また続けて、(次のように詠みます)

〈光源氏〉

手につみて　いつしかもみん　むらさきの

ねにかよひける　野べのわか草

「光源氏」は「僧都」の所へも久しく訪れていなかったので、人を

〔５２・ウ〕

【翻刻本文】

かはさる。「九月廿日の程に、尼君むなしく成給ふ」

と御返事に聞ゆ。京の御すみかには、姫君と少納言

こもりゐたるを、源とぶらひ給て、

あしわかの　うらにみるめは　かたくとも

こはたちながら　かへるなみかは

〈少納言〉よる波の　心もしらで　わかのうらに

玉もなびかん　ほどぞうきたる

姫君は、源の御ひざを枕にて、何心なくふし給へり。

「四十九日過て、父宮姫君の御むかへに参らん」と也。

「あさからぬ心ざしは、父宮よりも源はまさらん物を」

とて、かいなでつゝ、かへりみがちにて出給ぬ。道の

【現代語訳】

行かせることにします。すると、「九月二十日ごろに、「尼君」が亡くなりました」

と「僧都」から返事がありました。京の住まいには、「紫の上」と「少納言」

だけが閉じこもっていることを知り、「光源氏」は見舞いに行きます、

あしわかの　うらにみるめは　かたくとも
こはたちながら　かへるなみかは

（と、詠みました。この「光源氏」の歌に対して「少納言」は、次のように歌を返しました）
〈少納言〉

よる波の　心もしらで　わかのうらに
玉もなびかん　ほどぞうきたる

「紫の上」は、「光源氏」の膝を枕にして、無心に寝ています。
「少納言」は、「「尼君」の四十九日が過ぎましたら、父宮（兵部卿宮）が迎えに来ます」と言うのです。
「光源氏」は、「「紫の上」を思う気持ちは、「兵部卿宮」よりも私のほうが勝っているのに」
と言って、「紫の上」の髪をかきなでつつ、何度も振り返りながら帰りました。帰り

〔５３・オ〕

【翻刻本文】

ほどに、しのび／＼かよひ給ふ所あれば、門たゝかせ給
へど、聞付る人なし。御供の人にうたはせ給ふ。

朝ぼらけ　霧たつそらの　まよひにも
ゆきすぎがたき　いもが門かな

内よりつかひを出して、　　　誰ともなし

たちとまり　霧のまがきの　すぎうくは
草のとざしに　さはりしもせじ

二条の殿へかへり給ぬ。「姫君は父のもとにむかへ給
はん」と聞えければ、源、惟光を御供にて、夜ふかく
わたり給ひ、みなねたりけるをおどろかし、姫君を
もいだきおこして、「宮の御使に参りきつるぞ、いそ

【現代語訳】

道に、内密に通っている所があるので、「光源氏」はお供の者にその家の門を叩かせました
が、それに気づく人がいません。仕方なく、お供の者に歌を詠ませます。

朝ぼらけ　霧たつそらの　まよひにも
ゆきすきがたき　いもが門かな

中から使者が出てきて、誰かが、（次のように歌を返します）

たちとまり　霧のまがきの　すぎうくは
草のとざしに　さはりしもせじ

何事もなく、「光源氏」は二条院へと帰りました。さて、偵察していた「惟光」が「「紫の上」が「父（兵部卿宮）のもとへと、向かうようです」と言うので、「光源氏」は「惟光」だけをお供にして、夜遅くに「紫の上」のもとへと向かいました。突然の訪問は寝ていた家の者たちを驚かせましたが、「光源氏」は「紫の上」も抱き起こして、「「兵部卿宮」の使いで来たのですよ、急

〔５３・ウ〕

【翻刻本文】

ぎ、いざ給へ」とて、御車にのせ給ふ。少納言も「夢のこゝ
ちして、いかに」とやすひながら、よろしききぬき
かへてのりぬ。二条院におはしつきても、さすがこゑ
たてゝもえなき給はず。「少納言がもとにねん」との給ふ。
日たかうおき給へば、わらはべ四人めしにつかはして、
姫君に参らせらる。藤つぼのめいなれば、源、

　　ねはみねど　あはれとぞ思ふ　むさし野の
　　露わけわぶる　草のゆかりを

〈姫君〉かこつべき　ゆへをしらねば　おぼつかな
　　いかなる草の　ゆかりなるらん

【現代語訳】

いで、さあおいで」と言って、車に乗せてしまいます。「少納言」も「夢をみているような
気分で、どうしたらよいのでしょうか」とためらいながら、上質の着物
に着替えて車に乗り込みました。二条院に着いてからも、「紫の上」は（何をされるのかと怖がり）、さすがに声を
立てて泣くこともできません。「紫の上」は、「少納言と一緒に寝る」と言います。（しかし、それは叶いません。）
翌日、「光源氏」は日が高くなってから起きてきて、仕えている子供を四人呼び寄せて、
「紫の上」のもとへと行かせます。「紫の上」は「藤壺」の姪なので、「光源氏」は、

　　ねはみねど　あはれとぞ思ふ　むさし野の
　　露わけわぶる　草のゆかりを

（と、詠みました。この「光源氏」の歌に対して「紫の上」は、次のように歌を返しました）
〈紫の上〉
　　かこつべき　ゆへをしらねば　おぼつかな
　　いかなる草の　ゆかりなるらん